4．花山天文台の思い出

4.1　花山天文台の思い出

山本　進

花山天文台は昭和４年(1929)１０月１７日に落成式典が行われた。国道１号線、京阪電鉄線から天文台までの道路は昭和２年に伏見の工兵第１６連隊が演習として開削してくれたものであった。一車線幅のトラック道であったが舗装まではされなかった。当時は国道といえども舗装がなかったので誰もこれで十分と考えていた。

花山道路には目印のために８つの地点名がつけられた。下から順番に、トレミー・カーブ、オーマー・バレー、ブルーノ・ポイント、コペルニク・ターン、ケプラー・ポイント、ガリレオ・ウエー、ニウトン・ドロップ、ハーシェル・ウエーの８つであった。それぞれ標柱が立てられていて、地点を指定するのに便利であった。そのうちにオーマーが、いたずらで、オヤマーと加筆されていた。

国道１号線の北側、九条山には、当時、関西日仏学館があって、私の母(英子)はそこへ通ってフランス語をならっていた。母は父(一清)のアメリカ留学に随行していたが、帰国の途次、一清が英国のグリニジ天文台を訪問している間は、フランスのパリに独り滞在していた。その折に使っていた小形の英仏辞典(３センチ角掌中級)が今も残っているが、その縁でフランス語入門を考えたようだ。後年、東一条に移転した関西日仏学館に、私も昭和１２年にフランス語を習いに通った。入門の教科書は、母が「デュッポンさん」と呼んでいた前と同じ「Famille Du Pont」であった。また学館の事務員の中には母のことを覚えている人もあった。

九条山には、日仏学館のあと、ダンスホールが出来ていた。当時、京都には、九条山と桂にダンスホールが開業していた。私どもの先輩たちは、ここへ通って、映画の女優さん達に加わってダンスを楽しんでいたが、昭和１５年(1940)に全国的にホールが禁止閉鎖されてしまった。

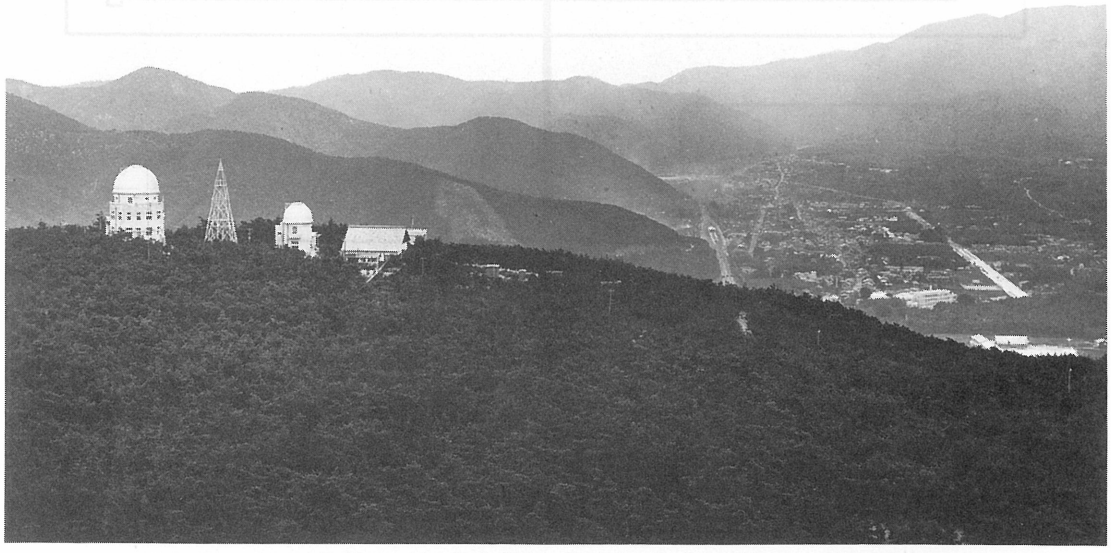

写真1　完成直後の花山天文台遠景

私は昭和８年(1933)に(旧制)松山高等学校に入学した。その同じ年に宮本正太郎先生が姫路高等学校から京都帝大へ進み宇宙物理学科に入学された。先生は１回生の時から花山天文台の宿舎に入り、観測実習に励まれた。その８月に、反射鏡の銀メッキをすることになって、太陽館で独りで準備されていた。アンモニア液の密栓を抜くと同時にアンモニアが噴出して眼を痛められた。その１ヵ月後に、私は高校の２０センチの反射鏡を銀メッキすべく預って帰っていたので、花山で仕上げることになった。その時も、誰も注意してくれなかったので、独りで太陽館で準備中にアンモニアの噴出を顔全体に受けた。早速、高野川畔、山端の眼下専門病院に入院した。アンモニアによる角膜腐食ということで、現在でも眼の検診の折にはその痕が指摘される。宮本先生も同じであったと思う。真夏の室温で(当時はどこでも冷房はなかった)コンクのアンモニア液を開栓すればどんなことになるか、化学の専攻者であれば学生でも常識のことであるのに、物理学科では誰も気がつかなかったようだ。

花山天文台には正規の職員や学生のほか、全国からアマチュア天文家がやってきていた。これが京都帝大の伝統をつくっていたと思う。その中には、中村要氏のようなプロになられた方もあった。後に東京天文台長になられた古畑正秋先生も長野から時々花山へ来られていて古畑少年と呼ばれていた。

昭和１１年(1936)６月１９日の北海道日食には、私は花山のグループに加えられて遠軽の家庭学校で観測した。前年８月には父と共に北海道の予定地を巡った。この日食にはチェコスロバキアからDr. H. Sloukaを隊長として、Hujer, Kopal, Jaschekの３氏がシベリア鉄道経由で来日し、６月２日に京都着、数日後に私が国鉄で東京まで案内し東京天文台の先生に引きついだ。

写真2　1936年6月19日の北海道日食の際。右から二人目が筆者（山本進）、三人目が竹田新一郎、四人目が Kopal、左から二人目が筆者の母（山本英子）

昭和１２年(1937)４月から理学部助手(無給)として正式に花山天文台職員となった。テーマは彗星カタログを編纂することであった。花山と教室にあった彗星の文献をすべて調査して、とりあえず、"Preliminary General Catalogue of Comets"を花山天文台の Publications (Vol.1, No.4, 1936)として発表した。現在ならば三鷹の資料をも調べるところであるが、当時は、そこまでは出来なかった。いずれは Galle の Kometenbahnenに類するものを考えていたが、翌年５月に兵役に召集されたので中断したままになってしまった。彗星カタログを発表するのに洗礼名をつけて Augustin Susumu Yamamotoの名を用いることにした。この名は、その後外国との通信には天文以外でも使っている。オーガスチンは懺悔録の聖アウグスチヌスのことである。

理学部助手は昭和１６年(1941)１月に農学部へ入学願書を出す折に退職した。

父(一清)は新聞に投稿することは、あまりなかったと思われるが、二回だけ寄稿欄に掲載されたことがあった。最初のは、昭和１０年前後のことで「制服は奉仕する人の服装であるから、学生に制服を着せるのは不都合である」というものであった。これに対して、軍人が軍服を着用するのは奉仕のためではない、という反論が掲載された。しかし、軍務はミリタリー・サービスであるから制服で差支えないと思う。

次は、昭和１３年(1938)１２月に、汪兆銘(汪精衛)が重慶を出て南京で和平宣言を発表したときで、近衛文麿公爵に出馬を呼びかける寄稿(投書)であった。私は当時、北京で軍務に服していてこれを讀み、面白いと思った。

写真3　筆者の父（山本一清　初代花山天文台長）

4.2 花山天文台の第一号分光器

川口市郎

私が未だ若かった頃、理学部は講座制で、第一講座は宮本先生、第二講座は上田先生が担当されていた。しかし昔の講座間の壁は高く、花山天文台は第二講座に属していたので、私共が簡単に天文台に行ける状況にはなかった。その頃宮本先生は、上田先生の退官後、花山天文台で観測的研究を始めようと考えておられた。先生は昔から天文観測に興味をお持ちで、先生が姫路高等学校(旧制)の生徒であった頃から、火星の観測に熱中され、その高校に"宮本先生の使われた望遠鏡"が大切に保存されているという話を聞いた事がある。先生は講座の乏しい財源から口径１４cmの西村製作所のシーロスタットを購入され、先生の研究室に保管されていた事を私はよく覚えている(２年又は３年の分割払い)。